

吉野川第一期改修百周年に向けて⑭

～幕末に治水・利水論を唱えた 庄野太郎（前編）～
株式会社フジタ建設コンサルタント 高田 恵二

はじめに

前号・前々号の連載で金原 祐樹氏により、幕末〔慶応二年（1868）〕の大水害「寅の大水」が紹介されました。今回は、その「寅の大水」を体験し、自らの治水論「水利に関する上言」を藩に提言した庄野太郎を取り上げてみたいと思います。また、「寅の大水」の前年〔慶応元年（1867）〕には、吉野川平野の利水に対する提案書「芳川水利論」を著し、これも藩に提出しました。これらの資料を紹介していきたいと思います。

さて、庄野太郎（しょうの たろう）とは、文献に「文化10年（1813）～慶応3年（1867）10月29日 享年54歳、江戸時代後期の徳島藩（現在の徳島県）出身の治水論者・儒学者、徳島県名西郡高川原村（現・石井町）で生まれ、江戸の昌平黌（しょうへいこう）で学問を修めた後、地元に戻り私塾を開き、地域の教育や治水事業に尽力した」と紹介されています。昌平黌とは、昌平坂学問所（しょうへいざかがくもんじょ）、1790年（寛政2年）、神田湯島に設立された江戸幕府直轄の最高学府（教学機関・施設）で、明治維新後、昌平学校として存続後、1871年に廃止され、その教育・研究の系譜は、開成所や医学所と共に東京大学の形成に繋がりました。



図 1 庄野太郎の墓石

「芳川水利論」の中においても、「太郎、往年東都に遊ぶ事五年」と江戸で5年滞在していたことを記しています。

1. 水利二関スル上言（庄野家文書）

前回の金原氏の執筆に、慶応二年（1866）に庄野太郎が藩に提出した「水利二関スル上言」の冒頭部分を少し触れられていましたが、今回は、この「水利二関スル上言」の内容を見ていく中で見えてくる庄野太郎の治水に対する知識的な部分を取り上げてみたいと思います。

なお、冒頭部分〔急務〕の解説文が必要な場合は、前号（Vol.69）で金原氏のご投稿をご参照ください。

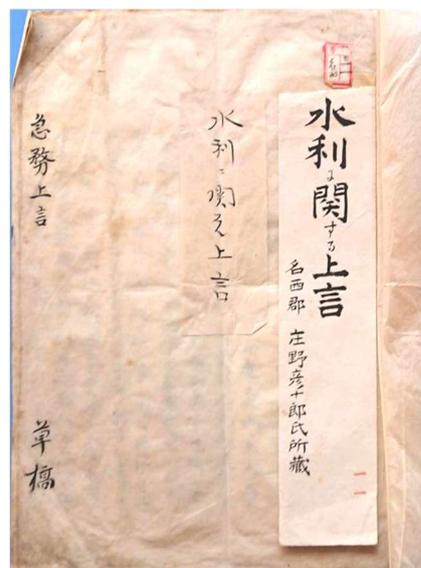


図 2 「水利二関スル上言」表紙

〔意識〕

急務

当年〔慶応二年（1688）〕八月七日・八日、および同月十五日の二度の洪水による人馬の溺死、資財の流失、五穀の水腐り、土壌の流失と荒廃、堤防の決壊等は、数え切れないほどである。真に重大なる被害であるため、富有のものに命じて他国産の米麦を輸入させ、土木工事を起こして、被災者に恵み施すことは、在位君主の当然の行為として既に〔他の人が〕建白されたようだ。

ひそかに他人の言に附和雷同することを遠慮し、また身分不相応の僭越の罪と恐れる。このため敢えて申し上げなかった。しかし心中で思考し、目に触れることや観察したことを少しも吐露しなかった。しかしただ黙視するばかりも不忠の罪になろうかと恐れる。このために、少し2・3の方策を建白いたします。

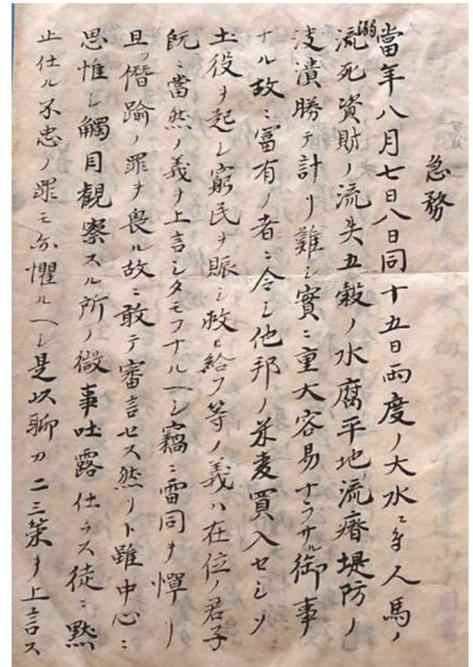


図 3 「水利二関スル上言」冒頭

「水利二関スル上言」の冒頭部分（図 3）に“急務”として、「寅の大水」の被災状況について触れています。この文末に2・3の方策を建白しますとしています。それ以降に3つ（第1～第3）の詳細な治水に対する提案が記されています。これよりその提案内容について確認していきたいと思います。

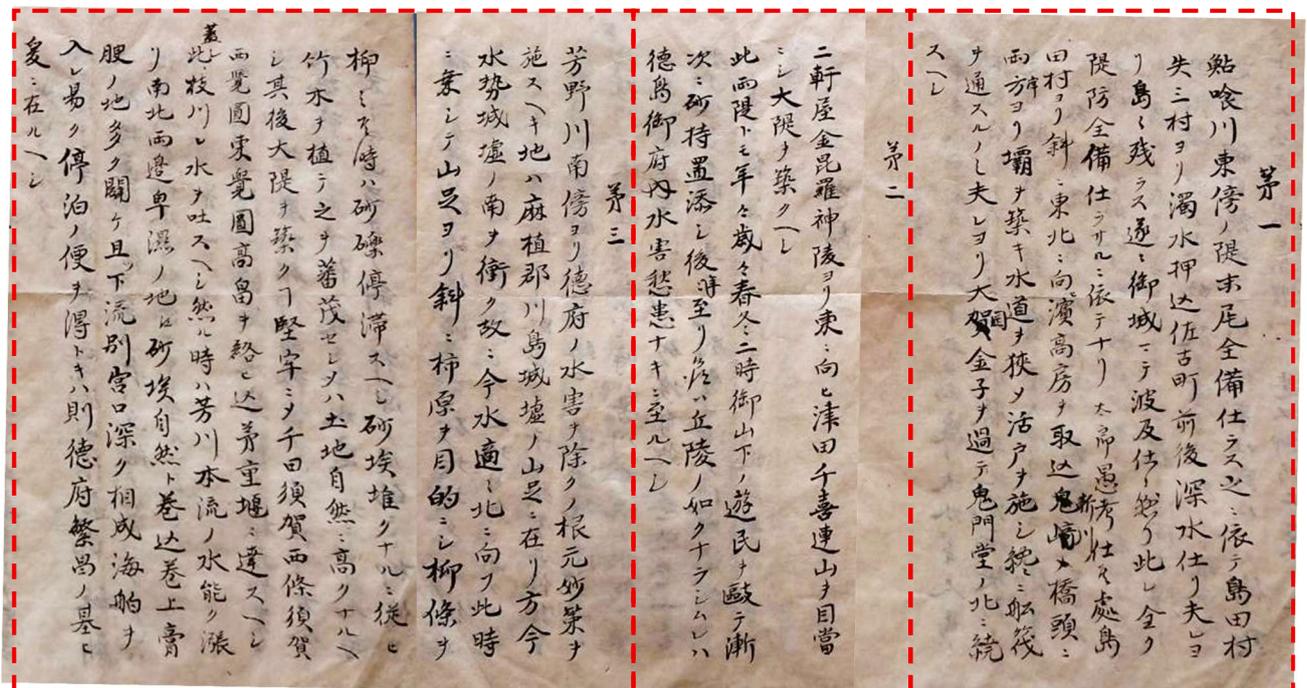


図 4 「水利二関スル上言」3つの提案内容部分

〔解説文〕

第一

鮎喰川東傍ノ堤、末尾全備仕ラス、之二依テ島田村・矢三村ヨリ濁水押込、佐古町前後深水仕

り、夫レヨリ島々残ラス、逐ニ御城マテ波及仕リ懸リ、此レ全ク堤防全備仕ラサルニ依テナリ、太郎愚考仕候処、島田村ヨリ斜ニ東北ニ向ヒ濱高房ヲ取込、新川橋頭ニ両岸ヨリ壩ヲ築キ水道ヲ狭メ浩戸ヲ施シ纒ニ船筏ヲ通スルノミ、夫レヨリ大岡金子ヲ過テ鬼門堂ノ北ニ繞スヘシ

第二

二軒屋金毘羅神陵ヨリ東ニ向ヒ、津田千喜連山ヲ目当ニシ大堤ヲ築クヘシ。

此両提トモ年々歳々春冬ニ時、御山下ノ遊民ヲ毆テ漸次ニ砂持置添シ、後年ニ至リ候得ハ丘陵ノ如クナラシムレハ、徳島御府内水害愁患ナキニ至ルヘシ。

第三

芳野川南傍ヨリ徳府ノ水害を除クノ根元妙策ヲ施スヘキ地ハ、麻植郡川島城墟ノ山足ニ在リ、方今水勢城墟ノ南ヲ衝ク、故ニ今水道ハ北ニ向フ、此時ニ乗シテ山足ヨリ斜ニ柿原ヲ目的ニシ柳条ヲ指之候時、砂礫停滞スヘシ。砂埃堆クナルニ從ヒ竹木ヲ植テ之ヲ蕃茂セシメハ、土地自然ニクナルヘシ、其後大堤ヲ築ク事堅牢ニシテ、千田須賀・西条須賀・西覚円・東覚円・高畠ヲ絡ヒ込、第重（十）堰ニ達スヘシ、蓋シ此ノ枝川ノ水ヲ吐カスヘシ、然ル時ハ芳川本流ノ水能ク漲リ、南北両辺卑湿ノ地工砂埃自然ト巻込巻上、膏腴ノ地多ク闢ケ且ツ下流別宮口深く相成、海舶ヲ人レ易ク停泊ノ便ヲ得トキハ、則徳府繁昌ノ基ヒ爰ニ在ルヘシ

2. 提案その1

まず第1の提案内容を見ていきましょう。次に「第1」の意識を示します。

第1

鮎喰川の東側の末端は、堤防が完備していない。このために島田村、矢三村より泥水が城下に押し込み、佐古町の周辺は深水となる。それから他の島々は残らず浸水する。遂にお城まで浸水が波及する様子である。これは全く堤防が完備していないからである。私の提案するところは、島田村から濱高房を取り込み、新川橋辺を両岸より堤を築いて水道を狭め、閘門を設置してわずかに船筏を通すだけにし、〔水路は〕ここから大岡金子を過ぎて鬼門堂の北へ廻らすべきである。

図5は、「寅の大水」の3年前に吉野川下流付近が描かれた絵図「徳島及周辺絵図（沖洲周辺・蔵本周辺合成）徳島大学図書館蔵」〔文久3年（1863）〕です。この絵図により提案第1に記載された内容が確認することができます。鮎喰川の右岸堤防（黄線）が島田村の西端で切れており、それより東側（島田村・矢三村の北側には）堤防が完備していないことが確認でき、そこから洪水が流れ出てくるのがわかります。

また図6は、現代の測量技術による3次元点群データを用いて作成した標高段彩図です。標高毎に色分けして土地の高低が確認できます。（青色が濃いほど標高が低い）

これをみると、島田村・矢三村あたりから浸水すると佐古町周辺が青の色が濃く、深水になることが確認できます。佐古町以東もお城周辺にかけても青の色が濃くなっている様子が確認でき、佐古町周辺の深水とお城まで浸水が波及していく様子が浮かんできます。

現在のような測量技術がなくても、庄野太郎が地形を把握していた事がよくわかります。



図 5 徳島及周辺絵図（沖洲周辺・蔵本周辺合成）（徳島大学図書館蔵）

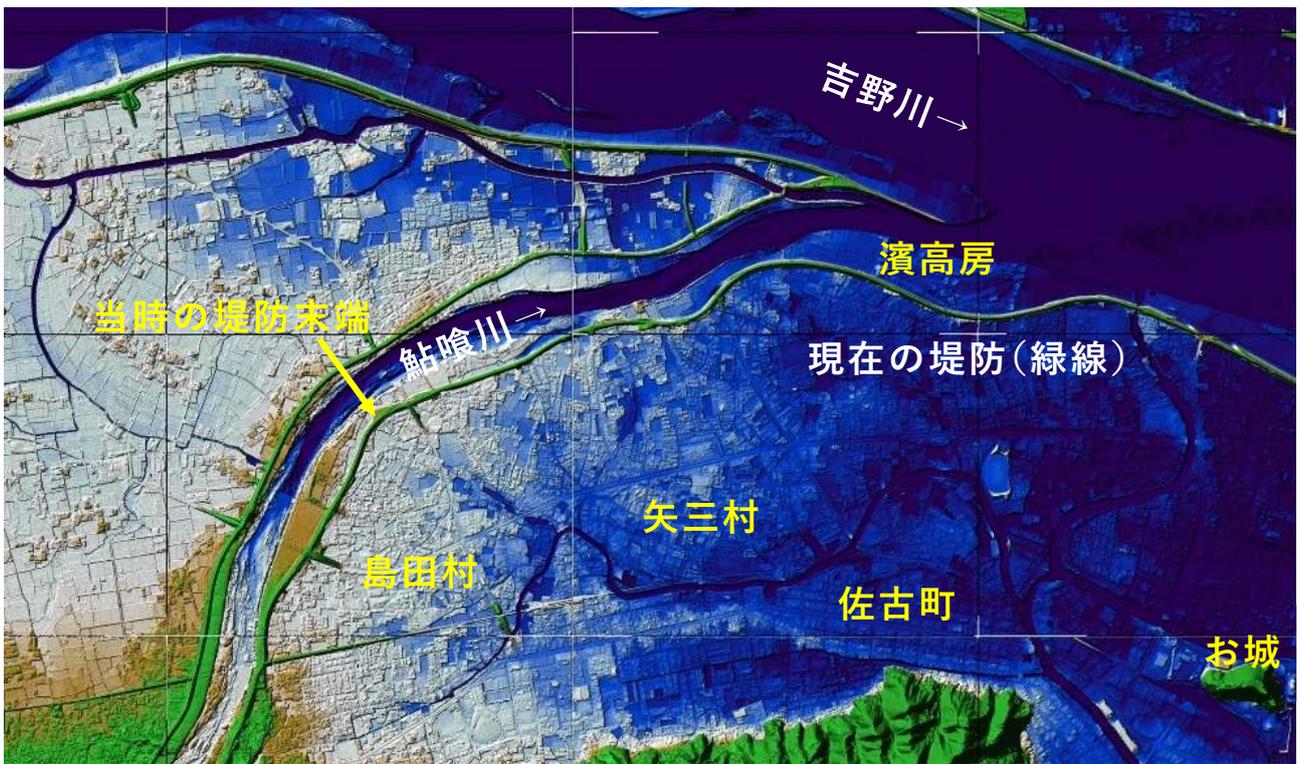


図 6 標高段彩図

堤防計画については、島田村から大岡金子を過ぎて鬼門堂の北へ廻らすとありますが、現在できている堤防（緑線）は、濱高房だけが堤防の外側になっていますが、おおよそ庄野太郎が言った内容で整備されていることが確認できます。また、新川橋辺を両岸より堤を築いて

船筏を通すだけの閘門を設置するといった内容についても、現在ここには新町川樋門が存在し、吉野川第一期改修工事において「平常時の船筏の航路を確保するために、別宮川の新堤と派川との交差箇所に樋門を新設する」といった内容とも一致しています。

最後に「大岡金子」や「鬼門堂」とありますが、現在の地名辞典では確認できません。しかし、図7「御城下絵図」〔享保12年（1727）〕（徳島大学図書館蔵）に「大岡」の地名が見え、図8「徳島及周边絵図」（徳島大学図書館蔵）に「兼子（金子）」の地名が見えます。図9「板野郡分間郡図」〔文化12年（1815）〕（三木文庫蔵）には「大岡別宮」が見えます。また、「阿波志」〔文化12年（1815）〕においても、興源寺の所在を「大岡に在り…」、江西寺（現在は無い）も「大岡に在り…」山王権現（現在の日枝神社）も「大岡に在り…」と記載され、下助任村周辺を指すことがわかります。

残念ながら鬼門堂については不明ですが、お城から鬼門（北東）方向に位置する大岡別宮の「地蔵寺」・「川裾社」・「弁財天」あたりを指しているのではないかと考えられます。



図7 御城下絵図（徳島大学図書館蔵）



図8 徳島及周边絵図（下助任付近）

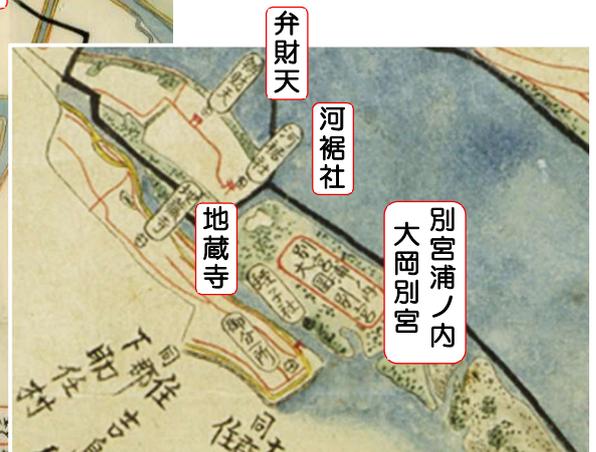


図9 板野郡分間郡図（三木文庫蔵）

3. 提案その2

続いて、第2の提案内容を見ていきましょう。次に「第2」の意識を示します。

第2

二軒屋金比羅神社より、東に向い津田千喜連山を目指して大堤防を築くべきである。両堤防ともに毎年春秋の二期に城下の民衆を使って砂を持って行かせられれば、後には丘陵のような堤防にすれば、徳島城下は水害の心配はなくなるだろう。

これは二軒屋金比羅神社から東に津田千喜連山に向かって大堤防を築くという構想で、これができるれば徳島城下の水害の心配がなくなるというのですが、これは今も存在しません。

ここで、「二軒屋金比羅神社」は二軒屋の眉山山裾の県道沿いに現在も存在しますが、「津田千喜連山」は、「図10 明治32年製版地形図（小松島浦）」の“断山”、昭和初期の地形図（徳島）では“千切山”など、過去の地形図でその名を見ることができます。また「阿波志」〔文化12年（1815）〕に「断山 新濱に在り…」とも記載されています。

近年、徳島駅周辺（旧徳島城下）に水害はあまり聞くことはありませんが、Vol.68金原氏執筆の橋本為太郎の書簡で「西船場は一円床上1～2尺（30cm～60cm）、東船場も同様、新町・魚の棚も同様、幟町 床上2～3尺（60cm～90cm）、大道筋は4尺（120cm）、定普請町は床上5尺（150cm）、東富田も同様、二軒屋ではかなり死人が出て…」というように「寅の大水」では水害により大惨事となっています。

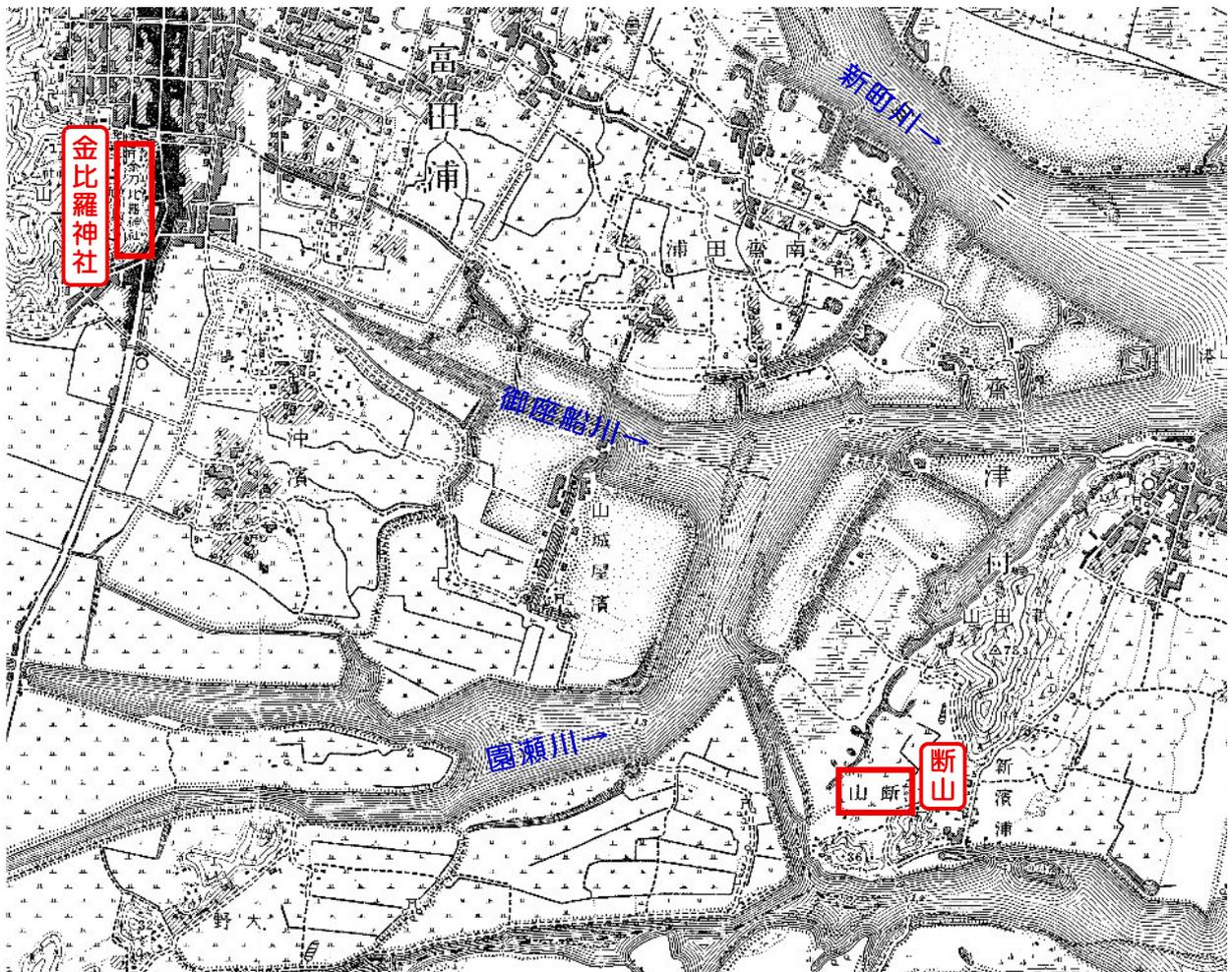


図 10 明治 32 年製版地形図（小松島浦）

また、明治 25 年（1892）7 月 22 日、寅の大水に匹敵する大水害が発生しました。この時の水害の状況の写真（図 11、12）が「土木学会附属土木図書館」に残されています。写真の題名から図 11 は御座船川北側の富田大麻彦神社（現明神町）が浸水している状況、図 12 は、大麻彦神社北西（現在の富田橋 5 丁目（大正頃地図に堀ブチの地名有り））付近の民家が倒壊した状況と推測されます。この水害は、高潮を伴った洪水で慶応二年以来の大洪水なり「海嘯全市を侵す」と、翌々日 7 月 24 日の徳島日日新聞に取り上げられています。



図 11 トミタ大麻彦神社境内ニテ施行



図 12 富田ホリブチ南側

（図 11、図 12 とともに土木学会附属図書館蔵）

「図 13 標高段彩図」で詳しい地形が確認できます。新町川と園瀬川の間地域が城下よりも更に土地が低いことが確認できます。富田大麻彦神社周辺は標高約 0.7m と通常の満潮よりも低い高さです。ひとたび高潮が来襲すれば周辺は当然深水になることがわかります。

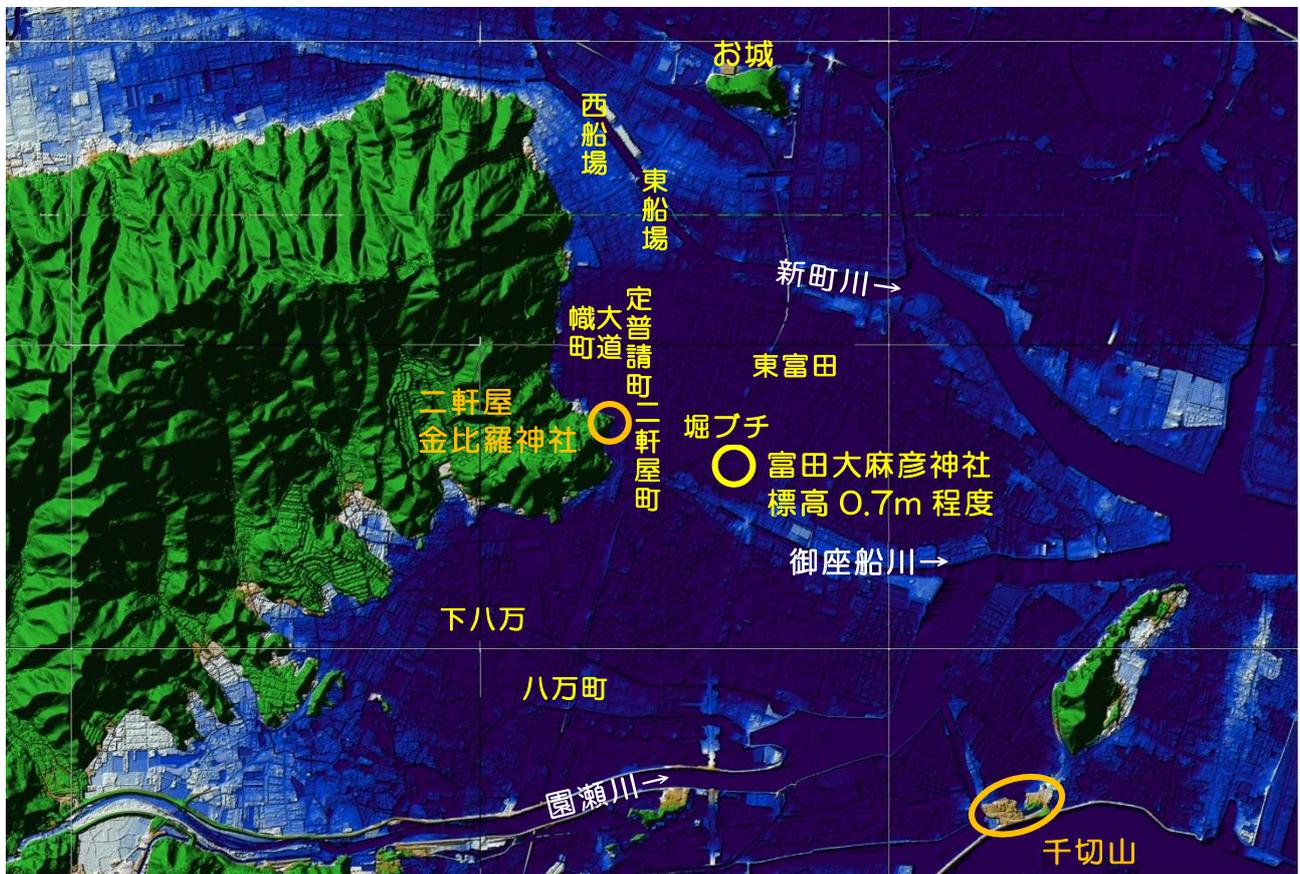


図 13 標高段彩図

このように、二軒屋金比羅神社から千喜連山に向かう大堤防の構想も庄野太郎が地形（土地の高さなど）を熟知して提案されたものだということがよくわかります。

むすびにかえて

提案第1及び提案第2の内容は、庄野太郎が城下を洪水から防ぐために記したものです。

「図14 徳島及周辺絵図」に提案第1と提案第2の堤防の位置を図化してみました。

提案第2の内容は現在も行われておりませんが、提案第1の鮎喰川から下流の堤防は、今から約100年前に竣工した吉野川第一期改修工事で築造された堤防や新町川樋門におおよそ一致することが確認できたと思います。庄野太郎は今から約160年前すでに徳島城下を洪水から防ぐために、現在の吉野川の堤防と同様の具体的な方策を提案していたのです。

今回、庄野太郎の徳島城下の治水論を紹介させていただきました。次号では残りの治水論や利水論について見ていきたいと思ひます。次号も続けてご覧いただければ幸いです。

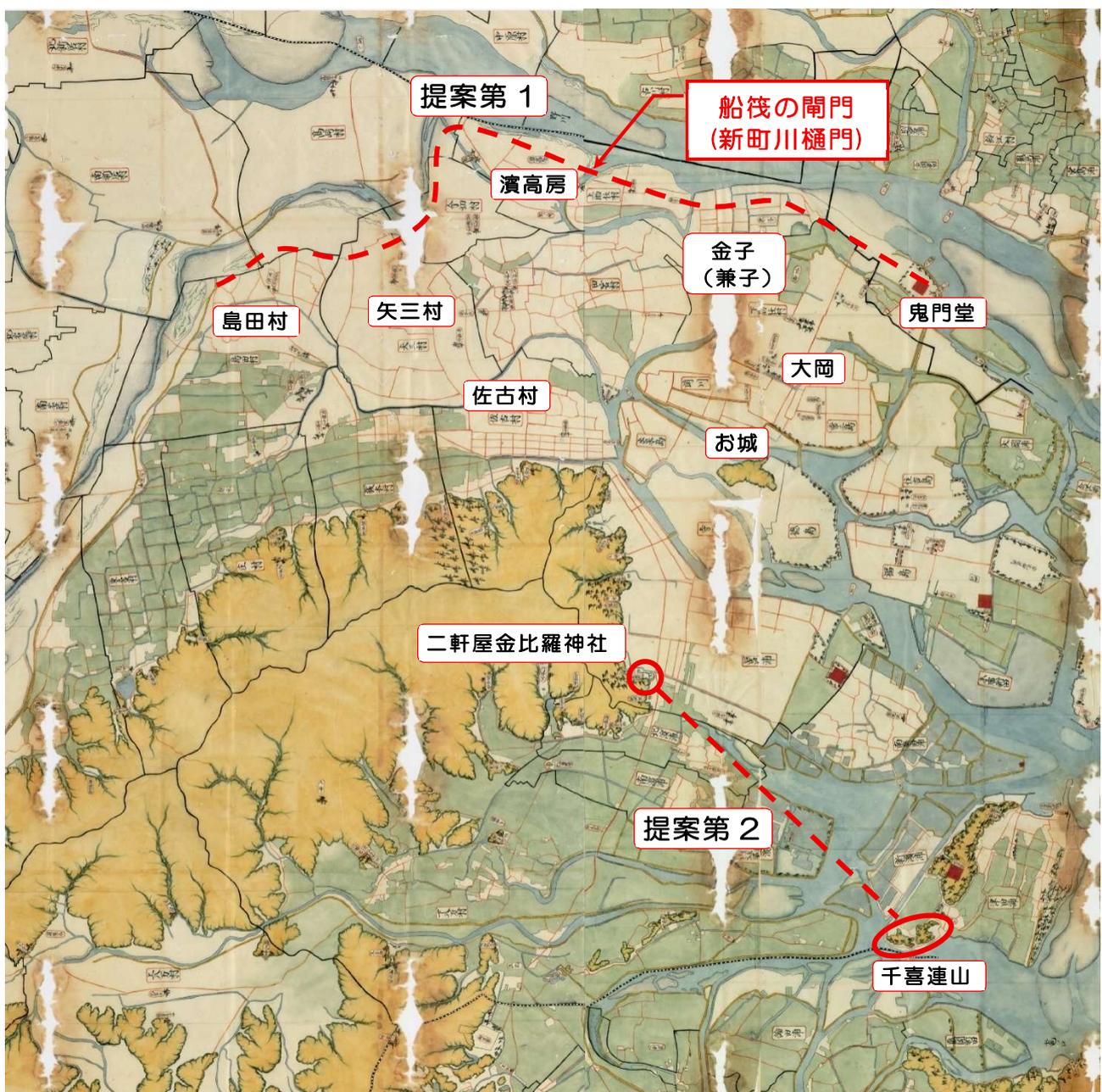


図14 徳島及周辺絵図（沖洲周辺・蔵本周辺合成）（徳島大学図書館蔵）